

くるか、こないか、いつか？ それは、誰も知らない。

一昨年のも連のアルメニア地震、昨年伊豆半島東方沖の群発地震に続く海底噴火、そして今だ記憶に鮮やかなサンフランシスコ大地震…。日本を含め世界各地で大きな地震が相次ぎ、相当な被害がもたらされています。明治の大科学者、寺田寅彦の「天災は忘れた頃にやってくる」という名言の、まさにその言葉通り、地震は何の前触れもなく突然襲ってきます。地震の事前予知が不可能だとしたら、私達には何ができるのでしょうか。それには、大地震がいつ起きたとしてもよいように、地震に対する正しい知識を身につけ、日頃から対策や心構えをしておくことしかありません。もし油断して警戒することを忘れていたら、自然は必ず痛烈なシッペ返しをします。明日起きてもけっしておかしくない地震に対し、いつも防災の心をもつよう心がけましょう。

備える。

準備。予備。整備。装備。守備。警備。
そなえる…用意する、そろえる、用心する
 防備。常備。完備。不備。具備。兼備。
そなえ…したく、用意、警戒、防衛
 備品。設備。備蓄。備員。備考。備忘。
そなわる…準備ができる、身に付く
 ●●●ソナエ アレバ ウレイナシ!!



1990

1

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
・	1	2	3	4	5	6
7	8	9	10	11	12	13
14	15	16	17	18	19	20
21	22	23	24	25	26	27
28	29	30	31	・	・	・

■毎月15日は川崎市民地震防災デーです。



かわさき NO
防災広報紙

1990年(平成2年)1月1日発行
 発行所 川崎市
 編集所 土木局防災対策室
 〒210 川崎市川崎区宮本町1番地
 TEL. (044) 200-2111 内線2841

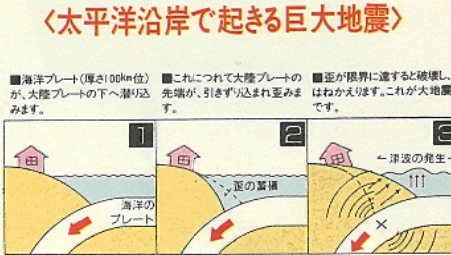
65



恐れる前に、まず地震を 知ることから始めましょう。

地震入門 これだけは 知っておこう

巨大地震は、なぜ起るのか。
地球の表面を覆っている地殻は、いくつかのプレートと呼ばれる大きな岩盤の寄り集まりで出来ており、年に数cmの速さで動いています。そのプレート同士の重なり合う所で、ひずみがたまり、それが耐えられなくなるとはねあがり、地震になります。このプレートの重なり合う境が、日本列島の太平洋側にあり、大きな地震がくり返し起る原因になっています。



震度とマグニチュードは、何が違うのか。
マグニチュード(略してMで表わします)が地震そのもののエネルギーの大きさを表わすのに、震度は、それぞれの場所での揺れの強さを表わします。したがって、震度が震源地(地震が発生した地点)からの距離や地盤などにより、様々な値で示される(一般的には0~7の8階級に分けられています)のに対し、Mは、一つの地震に一つの値だけということになります。(Mの値が一ランク違うと地震のエネルギーは、約30倍の違いがあります)

「警戒宣言」は何ですか。
東海地域の駿河湾を中心とする海域では、1854年・安政元年の大地震以来、大きな地震がなく、地震のいわゆる「空白域」で、近い将来発生するおそれがあると予測されています。

「警戒宣言」の発令を伝える信号

45秒	休み 15秒	45秒	休み 15秒	45秒
-----	--------	-----	--------	-----

●サイレン……一定時間つづけて鳴ります。

●警鐘……一定時間つづけて打ちます。

この東海地震(M8程度)が起きると、震源に近い地域(地震防災対策強化地域)では、震度6以上ですが、川崎市では5程度の揺れで、それ程大きな被害は出ません。あわてて避難する必要もありません。日頃の備えをしっかりとっておき、必要以上に地震をおそれず、落ち着いて対処しましょう。

- ラジオ・テレビで情報の把握に努める
- 火はできるだけ使わないようにする
- 家具などの転倒・落下防止措置を点検する
- 食糧、飲料水などを確認する
- 車や電話の使用を自しりする
- 家族の役割分担、避難場所などを確認する

過去の地震に学ぶ
◎関東大地震 (大正12年9月1日 M7.9)
地震の発生が火を使う昼食時で木造家屋が多く、初期消火の不足や消防力の弱さなどが原因で、地震そのものよりも火災による死者が多く、二次災害の恐ろしさを教えてくれました。昭和57年3月21日に発生した浦河沖地震(M7.1)では、昼食時であったにもかかわらず、住民が火を消す習慣を身につけていたため、被害を少なく抑えることができました。地震多発地帯のため、市民の防災意識が高かったことによる好例です。

◎伊豆大島近海地震 (昭和53年1月14日 M7.0)
果が発表された余震についての情報が一部の住民に誤解されて、いわゆる「デマ騒ぎ」に発展するという事態を招き、情報化社会の思わぬ落とし穴のあることを思い知らされました。

◎宮城県沖地震 (昭和53年6月12日 M7.4)
ブロック塀の下敷きになって亡くなった人やガラスの破片で負傷した人が多数に上り、また、都市生活の生命線とも言うべき電気・ガス・水道・電話などのいわゆるライフ・ライン機能が破滅的な打撃を受けました。ブロック塀の補強や電気・ガスなどが使えなくなった場合への備えなど、ふだんから心がけるべき多くの教訓を残しました。

◎日本海中部地震 (昭和58年5月26日 M7.1)
本震後、数分やってきた津波のため、死者104人のうち100人が亡くなっています。改めて津波の恐ろしさを私たちに教えてくれました。

「防災ビデオ・カレンダー」を全町内会に配布

防災対策室では、自主防災組織の活動を進めるためにビデオ「証言―震災体験者たちの声」とカレンダーを作成し、全町内会・自治会に配布しました。各種の防災映画の貸出しもしていますので、町内会等の会合などの際にご利用ください。

(お問い合わせ) 防災対策室
電話 200-2795
又は 区役所総務課へ)

昨年11月30日、川崎市立工業高校(定時制)で、年間行事の一環として、防災訓練と研修会(講演と防災映画の上映)が行われました。

防災対策室主幹による「大地震が発生したときの対処のしかたなど」を内容とした講演に生徒さんたちも真剣に聞き入り、改めて防災知識を学ぶ大切さを感じていました。

「サンフランシスコからの警鐘」

昨年10月、サンフランシスコ地域で発生したロマリータ地震(震源から約2kmにあるロマリータ天文台の名にちなみ、米国で公式名称になっています)の被害状況や応急対策活動の実態を調査し、今後の防災対策に役立てるため、川崎市を始め、東京都・神奈川県・横浜市等は合同調査団を11月16日から2週間現地に派遣しました。

マグニチュード7.1と中規模だったにもかかわらず、死者62人、負傷者3,000人以上の大被害をもたらした。都市災害の恐ろしさを見せつけた地震でしたが、軟弱地盤・液化現象、高速道路の崩壊・橋の落下、災害時の情報、ボランティア活動など多くの教訓を私たちに残してくれました。

大地震の恐ろしさを忘れかけている私たちに、もう一度、地震への備えを確かめなおすことの必要を教えたサンフランシスコからの警鐘だったのです。